

教育研究業績

2022年 5月1日

氏名 マルケス・ペドロ

研究分野		学位
言語教育・言語学・日本語教育		博士課程修了
研究のキーワード		
アイデンティティ・第二言語学習・言語教育学・移民		
教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
アカデミック・スキル	2016年 4月～ 現在	
映画祭ホスピタリティ・チーム・英会話	2016年 4月～ 2019年4月	
英語関連科目(英語I, II, III、初級英会話)	2015年 4月～ 現在	
日本語関連科目(日本語I、日本語II)	2015年 4月～ 現在	
TOEIC対策 GCC	2015年 4月～ 現在	
英会話(初級、中級) GCC	2013年 4月～ 現在	すべての科目に共通して、活動型教育を行い、言語能力知識だけでなく、コミュニケーションスキルの向上を図っている。具体的に言えば、履修者に実際の社会的な文脈における様々な活動を体験させ、科目によって英語あるいは日本語を実際に使いコミュニケーションをとることを促進している。
職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格, 免許 日本語能力検定試験1	平成19年	
2 特許等 特になし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項 地域日本語教室「にほんごわだの森」・日本語教師	2012年4月～ 2012年12月	早稲田大学日本語教育研究科によって実施された地域日本語教室「にほんごわだの森」にて、一人の実施員・日本語教師として早稲田に留学している外国人留学生や早稲田周辺に在住の外国人を対象に日本語の授業を計画・政策・実施。 コーディネーター: 池上麻希子教授
目黒区教育委員会派遣日本語指導員	2011年4月～ 2014年12月	目黒区教育委員会派遣日本語指導員プログラムの「日本語指導員」として目黒区の小・中学校にて、外国人児童に放課後の特別日本語支援(初・中級の日本語教育・日本語支援)。
サンパウロ大学人間科学部日本語教育非常勤講師	2008年4月～ 2010年4月	日本語能力試験2級、漢字(初・中・上)、コミュニケーションのための日本語初級1、ビジネスのための日本語、夏・冬休みの漢字クラス コーディネーター: モラレス・松原玲子教授

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
(学術論文)				
1『JSLの子どものことばとアイデンティティの課題—日本語話者というアイデンティティの可能性を巡って—』	単著	2013年3月	早稲田大学大学院日本語教育研究科修士前期課程論文	本論は、日本語を第二言語として学ぶ子どもにおけることばとアイデンティティの関係を日本語教育実践事例に基づいて捉え直し、ことばとアイデンティティの関係を考察することを目的とする。なお、ことばとしてのアイデンティティ確認プロセスが成功することにより、JSLの子どものことばの学びにはどんな影響があるのか、実践者が学習者と関わったことで、学習者のことばとしてのアイデンティティ規範にどんな影響を与えられるのか、学習者がことばの学びにおいてどのようなアイデンティティを表出しているのか、等が今までの言語教育研究で問われていなかった課題であり、本論では捉え直される課題である。
2『Os Empréstimos Lexicais do Japonês no Português Falado por Nisseis Jovens Paulistanos. 』	単著	2008年8月	サンパウロ大学人間科学部紀要	本研究は、日本・日本語と関わっているサンパウロ在住の若い日系ブラジル人(3人)と、非日系人で、日本・日本語とは全く関係のないサンパウロ在住の若者(3人)のポルトガル語での会話における日本語借用語の有無・使用頻度・使用文脈を調査し、その両方の結果を対照的に比較したものである。目標は、ポルトガル語では日本語からのどのような借用語が使用されているかと、日系人対非日系人、または日本語との接触の有対無の二項対立の誠実性を探ることである。結果として、日系人の場合、コード・スイッチングが見えるものの、借用語に関しては日系人・非日系人、そして日本語との接触の有・無には差は見えなかった。結論として、ポルトガル語には日本語からの借用語は非常に数少ない名詞に限られていることが分かった。
3『「にほんご わせだの森」における日本語話者というアイデンティティ —日本語教師の役割を捉えなおして—』	単著	2012年8月	『地域日本語教育実践研究』7(2012春):82-94	2012年春学期に行われた「にほんご わせだの森」を実践事例に、日本語教育におけるアイデンティティ概念を捉え直し、そしてそこから日本語教師・支援者の役割を捉えなおすことを目標とする。そのために、日本語教育においてアイデンティティがどのように解釈されてきたかを振り返って、次に「にほんご わせだの森」はどのような地域日本語教室だったのかを明らかにする。そして、そこではどのようなアイデンティティが見られたかという論点から考察を始める。それから、それを土台に「にほんご わせだの森」日本語教育者の役割を、更に広い意味で言えば、日本語教育の役割を捉え直すところまでに議論を進める。
4 金丸巧・マルケス、ペドロ 「目標言語社会の一員としての意識を支える日本語教育実践とは —「2対2の実践」を通して—」	共著	2012年6月	『年少者日本語教育実践研究』18(2012):21-30	本稿では、「2対2の実践」が、実践開始当初目標言語社会である日本を認めていなかった生徒Fと生徒G(仮名)の日本語の学びにどのような意味を持っていたのかについて考察を行う。4人での「手紙交換」や「片仮名英語を学ぶ」などの活動を通して、生徒Fと生徒Gが、目標言語話者同士のやり取りに参加していることを味わえ、自分自身も目標言語話者と実際に関係を持つことができた。その結果、彼らは、この環境においては目標言語社会と実際に関わりをもつ一員となり、目標言語社会を認めるようになり、教室外でも言語活動を積み重ねるようになった。本稿の主張点は、学習者が目標言語話者に認められることは指摘されてきているところであるが、学習者自身も目標言語社会・目標言語話者を認めることの重要性である。また、共著のことに、実践も論文も完全二人で進めたため、ページ数などの具体的な貢献度を明記できない。

<p>(その他)</p> <p>1 『アイデンティティとことばから見た今後の日本語教育』(ポスター発表)</p> <p>2 『JSLの子どものことばとアイデンティティの課題』(口頭発表)</p> <p>3 『JSLの子どもにおけることばとアイデンティティをどう解釈し、どう支援するか—JSL児童生徒への日本語支援実践の事例を通して—』(口頭発表)</p> <p>4 松本裕典・角浜ひとみ・マルケス・ペドロ・高須こずえ・田中奈緒『重ねた「対話」がもたらす言語教育観の更新—「つながりを作る」を目指した「にほんごわけだの森」の実践のプロセスから—』(ポスター発表)</p> <p>5 マルケス、ペドロ・松本裕典・角浜ひとみ・高須こずえ・田中奈緒『「日本語話者」というアイデンティティ—「にほんごわけだの森」が目指す「つながりをつくる」ことの意味』(口頭発表)</p>	<p>単著</p> <p>単著</p> <p>単著</p> <p>共著</p> <p>共著</p>	<p>2014年11月</p> <p>2013年2月</p> <p>2012年8月</p> <p>2012年9月</p> <p>2012年9月</p>	<p>2014年度台湾日本語教育研究国際シンポジウム</p> <p>早稲田大学第3回年少者日本語教育研究フォーラム、2013年2月18日</p> <p>2012年度日本語教育国際研究大会名古屋、2012年8月19日</p> <p>早稲田大学日本語教育学会 2012年秋季大会、2012年9月23日)</p> <p>国際研究集会：私ほどのような実践を目指すのか—言語教育とアイデンティティ、2012年9月9日</p>	<p>本発表では、アイデンティティとことばがなぜ日本語教育において議論されはじめたか、そしてどのように議論されはじめたかを先行研究を通して振り返って、今までの日本語教育の存在意義・あり方をアイデンティティの立場から批判的に考察する。その考察を基に、ポスト構造主義である21世紀において、日本語教育にはどのようなあり方、またどのような存在意義があるかを議論し、アイデンティティとことばの理解・アイデンティティとことばへの働きかけを基とする日本語教育を提案する。</p> <p>本発表では、年少者日本語教育におけるアイデンティティという概念を脱構築し、再構築する。具体的に言えば、ことばの学びにおけることばとアイデンティティの関係の明確化を求めて、日本語を第二言語として学ぶ4人の子どもへの実践事例をデータに、彼らが日本語を学ぶ・使用する過程でどのようなアイデンティティにアクセスしているか、またことばと様々なアイデンティティ規範はどう変容していくかを具体的な例を挙げながら検討する。</p> <p>筆者が行った3人の日本語を母語としない児童への日本語教育実践データを基に、ことばとアイデンティティの関係を考察する。彼らの場合、どのようなアイデンティティがどのような文脈で日本語学習に繋がっているのか、また、どのようなアイデンティティが日本語学習と関わっていないのかを明確にした結果、アイデンティティを視野に入れた新たな教育的な立場の可能性を訴える。</p> <p>「日本語早稲田の森」という日本語教育実践場で、実践者らが目指した「つながりを作る」を行うことで、実践者ら自身がどのようにその教育観を更新させていったかを考察する。実践者らは「つながりを作る」ことを勝手に「学習者にとっていいことである」と決めてその発想を基に実践を組み立てたが、実践を行っていく中で学習者らは、自分自身で実践の意味を築いていくことに気づいた。その気づきから、言語教育実践の絶えず変容する姿の重要性が分かり、実践者が目指すべきなのは変容プロセスなのではないかと主張。また、共著のことにに関して、実践も発表作成・実施も5人で進めたため、ページ数などの具体的な貢献度を明記できない。</p> <p>「日本語早稲田の森」という日本語教育実践場で、実践者らが目指した「つながりを作る」ことの意味・効果について考察する。学習者らは、教室という社会の中でアクティブに言語活動を行い、日本語を話す人、すなわち「日本語話者」としてのアイデンティティを活かし、お互いに日本語による言語活動を積み重ねることに学びが起きたと主張。また、共著のことにに関して、実践も発表作成・実施も5人で進めたため、ページ数などの具体的な貢献度を明記できない。</p>
---	---	---	---	---